

盂蘭盆会施餓鬼供養法要

維れ時は令和二年に移り、新型コロナウイルスが中国武漢から発症。たちまちにして世界中にその猛威が広がり、騒然となる。未だ半年を越えるも終息の気配は見えず。世界人類の不安はつるばかり。ひたすら平穩無事を祈りつつ人々は安穩の日暮しを早くきたらんことを望むものなり。

本日八月二日、恒例の安養寺盂蘭盆施餓鬼供養を観音堂外陣において施餓鬼壇もうを設け奉修される。

安養寺は遠く天平時代に聖武天皇の発願により良弁僧正の開

創こさつされた古刹にして東方瑠璃山の山号を有し、朝に観音 夕に薬

師の庶民信仰の霊場なり。国の重要文化財指定の薬師瑠璃光如来を本尊と仰ぎ納まる本堂は境内中央そびに聳え輪奐りんかくの美を極める。

薬師如来は、多くの病苦しずに沈む者を救う。さらに無明の久しく治らない痼疾こしつの病むものを癒いやして、昼夜を分わかたずお働き下さる。

古来からこのたびのコロナ禍かのような疫病にも効験こうけんが灼あなたかあな靈験の証しが伝えられている。

人としてこの世に生を受けたものは必ず通る苦悩の道がある。生、老、病、死の四苦である。真言宗宗祖弘法大師も三度わたに亘る病いで苦しまれたといわれる。当山ご住職の熊谷俊亮和尚もがんを発症され手術を受けられ養生中の身である。頑健がんけんな体で難行にもよく耐

えてこられ、病い知らずの堂々とした豪快な和尚が思わぬ病にあつて、戸惑われたが、今や二人に一人はがんなどの病いにかかっている事実はげにふれられ、心機一転。さらに一層の「我行精進」我が行いに勤めつと励まれ、病む方々にも寄りそわれる。本来の「生涯修行」の目標にも果敢に取り組まれている。その一つが年一回続けてこられた四国八十八カ所霊場巡拝をがん発症後も休みなく続行されている。

そもそも盂蘭盆会は、苦海を渡る船ふね、筏いかだで楽しい岸、楽岸らくがんに到る橋、渡しなり。

伏して以おもんみれば、盂蘭盆の起源はインドの仏教の開祖・釈迦の在世の時より始まる。釈迦には当初十人の弟子があり、その筆頭で智慧者、神通力第一と称された目連尊者そんじゃが、暑中にふと亡き母がどうしているかと居場所を知りたくなる。自からの神通力を使っても全くわからない。そこで師匠の釈迦に尋ねると、地獄に墮おちて苦しんでいた。まさか母親が地獄にと悲しんだ目連尊者が救われる方法を釈迦に問う。

釈迦は今インドで一番暑くそれに大雨が続いて修行僧侶が困すっているので食物を施し供養せよと。布施の行いを勧めすすめる。すると、その功德で目連尊者の母・精提女は、地獄より救われる。では、目連尊者のようなりっぱな偉い坊さんの母親がなぜ地獄に墮ちたのか—という疑問がわく。母親が子供を育成するには多くの苦勞を背負う。

食べものがなくなれば盗んでも子供には与える。他人の子は邪見じゃけんに

してもわが子は可愛がる。こうした生前の行為から地獄へ真逆さままっさかへ墮ちたといえよう。

そんな母親の行為も知らずご恩を忘れた目連尊者の布施・供養よみがえから母の蘇りする故事がお盆となりし、日本では国民的行事となつて今に生きている。「お盆はうれしや亡き先祖が帰ってくる」と、かんき歡喜して先祖を迎えそして再び浄土へ名残りを惜しんで送る。

先祖をタテ系に家族をヨコ系にして結び合う。私どもの生命の流れは先祖にある。心豊かな日常生活の営みに先祖すなわち仏さまの柱が必要欠かせないのである。先祖、仏さまの心は、輝きは智慧の心、潤うるおいは慈悲の心であるーと。

乃至法界 平等利益

南無大師遍照金剛

令和二年八月四日

京都府向日市寺戸町西垣内十五―六四

亀光庵

住職 土口哲光

敬って白す。